

# 乱交テニス部ロッカールーム寝取られ

初恋のあの子といじめられっ子の僕が結ばれる可能性は限りなくゼロだったはずなのに、結ばれてからもNTRが止まらない

## 後編



八ヶ岳昌司



## 第九章 新婚

「まさくん……まさくん……起きて、もう朝よ」

希美の声が聞こえる。

正善は目を覚まし、ベッドから体を起こす。

夫婦のダブルベッド。

希美は先に起きて、朝食を作ってくれていたようだ。

「おはよう、まさくん」

パジャマ姿のままですとーストとスクランブルエッグを作っていた希美が、正善に朝のキスをする。

梅之園学園の一年生だった頃に初めてキスをしてから、二度目のキスをするまでに二年以上の月日が必要だったけれど、今ではこうして毎朝、そして毎晩、希美とキスすることが出来

る。

あれから二年。

正確に言えば、卒業式の日には正善と希美が二年越しの二度目のキスを交わしてから、二年と四ヶ月。

今では希美と正善は、新婚三ヶ月の夫婦だ。

二人が出ることの出来なかつた卒業式の日には、思い出の場所で偶然再会して以来、二年間の交際の後には二人は結婚した。

あの頃は十代の少年と少女だつた二人も、今では二十代になり、法律的にも大人と認められる年齢になつた。

正善はとある食品加工会社で働きながらも大学の夜間学部に通い、希美もまた別の会社で事務職に就きながら将来のために経理の勉強を始めている。

この二年間の間に、様々なことが変わった。

希美のことを遠慮がちに『希美ちゃん』と呼んでいた正善は、今では彼女を自分の妻として、

愛情を込めて『希美』と呼ぶようになり、希美もまた正善のことを『正善くん』ではなく、より親密に『まさくん』と呼ぶようになった。

二人は親元を離れて市内のマンションを借り、そこに一緒に住むようになった。そして半年の同棲生活の後、家族だけのささやかな式を挙げ、二人は籍を入れて晴れて夫婦となったのである。

梅之園学園であんな事件に巻き込まれ、学校も中退して、いわば『傷物』になってしまった娘のことを、希美の両親は心配していたが、そんな希美の結婚相手があこの事件の責任を一身に背負って退学になった少年であり、実は希美の本当の思い人だったということを知って、心から安堵し二人を祝福した。

そんな相手であれば、希美が困難に直面した時にも逃げ出さずに、娘の心強い味方で居続けるに違いない。

正善が夜間学部に通おうと思ったのは希美の影響だった。

希美は梅之園学園を中退した後も自主的に勉強を続け、高卒資格試験に合格していた。希美と交際を始めてから、正善は彼女に刺激を受け、また彼女にふさわしい男になろうと勉強を始

め、自分も高卒試験を受けると、そこからさらに勉強を続けたいと思ったのである。

希美は現実的に仕事になるからと言って経理の勉強を始めたが、彼は今年から、とある大学の夜間学部に通い始め、経済学の勉強をしていた。

そしてもちろん、変わらなかったこともある。

希美は相変わらず1950年代や60年代の古いロックンロールが好きで、二人の住むマンションのダイニングにはザ・ビートルズはもとより、エルビス・プレスリー、チャック・ベリーといった音楽がタブレット端末から流れていた。

正善もまた、今は亡き友人である松井に教えてもらった1970年代のプログレッシブ・ロックであるピンク・フロイドを時折聞いていた。

一番変わらなかったのは、二人の愛情だ。

正善は一目惚れしたあの時と変わらない愛情で希美を愛し続け、そして希美もまた、自分には正善が必要であることを知っている。

同じベッドで眠り、朝晩のキスも欠かさない二人は、新婚三ヶ月の初々しい夫婦にふさわしく、傍から見てもラブラブな生活を送っていた。

けれども、ひとつだけ問題があったとすれば、それはセックスだった。

恋人同士となり、そして今では夫婦となり、正善は晴れて希美と結ばれた。

テニス部時代に、あれほど憧れ、見とれていた希美のお尻を、今では夫婦のベッドの中、正善は心行くまで撫で回し、愛撫することが出来る。

そして彼女の豊かで形のいい乳房も、今では正善だけのものだ。

けれどもセックスは盛り上がらない。

もちろん、希美は「あああ」と幸せそうな声を上げてくれるけれど、それは愛情から来るものであって、身体の快感ではない。

「ん……ん……ん……ん……」

控えめな声で反応し、その色っぽい吐息は正善を興奮させるのに十分だが、希美自身が本当に興奮しているわけではないことを、正善はわかっていた。

正善は思い出す。

いつか見た、男に抱かれている希美の姿を。

忘れてしまいたい嫌な記憶だ。

でも、小久保の腕に抱きしめられていた時の希美も、そして山口の下で足を開いていた時の希美も、もつと夢中になり、そしてもつと大きな声であえいでいるように見えた。

恋人になって二年以上。

そして夫婦になってから三ヶ月。

希美はまだあんなふうに欲望をむき出しにしたキスを、僕にしてくれていないように思う…

：

そして僕は、希美のあんな声を、まだ聞いていない…

物足りないんだろうか。

僕のこの、ほんの12センチほどの、決して大きいとは言えないものが。

ひとつたび自信を失うと、男というものは、自分ではどうしようもなくなってしまうことがある。

裸の希美を前にして、いざその時になると、弱々しくしおれ、立たなくなってしまうことが、正善には次第に増えていった。

そんな理由もあって、ラブラブの新婚夫婦でありながら、正善と希美が、本当にひとつになるのは、せいぜい一ヶ月に一度。

かといって、ベッドの中ではいつも抱擁をするし、彼女の身体をいつも感じている。

寝る前にはお互い長いキスをして愛を確かめるし、正善の腕の中で安心しきつたように眠りに落ちる希美はとても幸せそうだ。

けれど、すやすやと眠る希美のきれいな身体の曲線を眺めながら、正善は考えてしまう。

この希美の胸を、あいつらが、何度も何度もなめまわした……

この希美の股間に、何人もの男のものが、好き放題に出入りを繰り返した……

正善の脳裡に、かつての同級生である、憎い男たちの顔が浮かぶ。

だが皮肉なことに、そんな時、正善の股間の12センチは、嫉妬と興奮で痛いほどに勃起し

てしまう。

セックスが月に一度なのに、正善はこの、希美が眠りに着いた後の深夜のオナニーを、毎晩というほどに繰り返してしまう。

彼の頭の中には、小久保に、加藤に、佐々木に、山口に、石川に……犯されて大声をあげる希美の姿が浮かび上がっている。

それは決して妄想ではない。

現実にあの頃、希美は彼ら五人にもてあそばれ、妊娠と中絶を経験したのだから。

たとえ何年という月日がたつても、自分をいじめていたテニス部の同級生たちに、最愛の希美を奪われた正善の心の傷は、決して癒えてはいなかったのだった。

そして希美の身体も、彼らに抱かれたその快感を、忘れてはいなかった。

「ひさしぶりだな、小久保。二年ぶりか？」

「ひさしぶりだな、じゃねえよ、佐々木。オレは客だぜ。いらつしやいませ、とか言えないのか？」

ここは市内の繁華街にあるガールズバー。いわゆる女の子のいる店だ。小久保はこの店で、黒服として働いている。そこへ小久保が訪ねてきたのだ。佐々木は小久保にとって、梅之園学園時代にもっともウマの合う、悪友といえる仲だった男だ。

「変わってないな、安心したぜ小久保。重役の椅子の座り心地はどうだ？ 辞めたんだろ、テニス？」

「ああ、一時はプロ入りも考えたんだけどな。でも思ってみればオレは別にテニスにすべてを

賭けようって思ってた訳じゃない。肘を痛めたのはいいタイミングだったのかもしれない」

小久保は立派なスーツを着込んでいた。歳の離れた兄が政界への進出を決めたため、テニスを辞めた剣二は父の会社を継ぐことを決意し、この春から取締役の座に就いている。半端な決意では認めない父を納得させるために大学も辞め、この数ヶ月の間に取引先への挨拶も済ませた。

片や佐々木はまだ下っ端ではあるが、黒服として夜の町でのキャリアをスタートさせている。交友関係の広い彼はその人脈を生かし、やがてはこの夜の町で成り上がる野望を持っている。

「みんなは元気にしてるのか？」

みんなというのは、かつてのテニス部の同級生たちのことだ。小久保がこう聞くのは、夜の町で働く佐々木の顔の広さと情報網の力を知っているからである。

「ああ、みんな、って言っても、同じ歳のテニス部の仲間は五人だけだろ。お前は重役、俺は黒服。山口は土方をやってるらしい。イメージ通りで笑えるよな。石川は隣町で大学生をやっ

てるって聞いた。意外と頭良かったもんな。加藤はお前のところで働いてるんだろう？」

「よく知ってるな。営業で飛び回ってるよ。今日も連れて来たかったんだが、あいにくあいつは県外に出張だ」

その五人の他にも、本当はもう二人、男子テニス部の部員がいたのだが、存在感の薄かったその二人のことを思い出すためには、小久保も佐々木も時間がかかる。

「死んじまったやつもいたなあ。遺書にはオレの名前が書かれていた。まったく嫌な思い出だぜ。あれをもみ消した後、オヤジにどれだけ絞られたことか」

「まったくくだよな。一部のニュースにはお前の名前も出ていたのに、遺書で名指しされて無罪放免になるのはお前くらいだろうぜ。もつともそのすぐ後、お前はテニスでヒーローになって、みんな帳消しになったけどな」

佐々木が片手を上に向けて、帳消し、という部分を強調してみせた。世の中は立ち回り方ひとつだ。

二人とも悪かったが、うまくやってきた。

佐々木も小久保のそばにいたせいで、学園時代には何人もの女にありついてきたのだ。

「そういえば、もう一人いただろう……何だっけ、そう、川辺だ、川辺。あいつは一年の時に退学になったし、影も薄かったから、思い出せなかつたぜ」

「ああ、それがちよつとしたニュースなんだ。なんでも川辺は、高木希美と結婚したらしいぜ」  
「なに？　高木希美!?!」

その名前を聞いて、さすがの剣二が驚いた。

かつて処女を奪いながらも、自分の思い通りにならなかつた一人の美少女のことは、剣二のその後の女性遍歴の中でも汚点のようにして記憶に残っている。

「そういえばあの女は、川辺のことが好きだって言ってたけど……本当に結婚しちまうとは、驚きだな」

剣二は不思議な感慨を覚えた。希美はあいつに同情しているだけ、彼はずっとそう思っていたのだ。

「川辺の方も、俺たちがさんざんやってやり捨てて、妊娠までさせた女と結婚するなんて、よっぽどのアレだぜ。つまり、マゾっ気がないとできないぜ」

佐々木はニヤツと笑って、指でMの字を描いてみせる。

「SMはお前の得意分野だもんな。そうか、マゾだったのか、あいつ」

「お前のせいだろうよ、小久保。あいつをさんざん蹴っ飛ばしていじめてたのはお前なんだから。それがクセになっちまったんだろう。人の性癖つてのは、若い時の経験で決まるんだぜ？」

「おいおい、ヘンなこと言うなよ。責任感じるじゃねえか。でも、その二人がまさか結婚とはな……」

「夫婦揃ってMだな。高木希美がマゾ美だったから、川辺正善はマゾよし、つてわけだ」

「マゾよしクンと、マゾ美ちゃん、か……」

小久保が無意識のうちに舌なめずりをする。

「へへ……変わってないな。Sつ気を起こした時のお前のクセ。そう来るだろうと思つていたぜ。実はもう情報はつかんである。高木希美、つまり今では川辺希美になつてゐるわけだが、彼女の勤務先の上司はうちの上客でね……」

佐々木はそう言つて、懐のケースから一枚の名刺を出し、小久保に渡す。その名刺にはN・T・Rというアルファベット三文字のロゴマークが、社名の横に書かれていた。

「ニュー・トランジット・レゾリユーション。電子部品の会社なのか？　ここに高木希美、いや今では川辺希美、つまり、あのマゾ美ちゃんが、務めてゐるんだな？」

「そのとおりだ。落としたら俺にも分けてくれよ？　あの頃みたいによ」

「フツ、なんだか懐かしい気分になるな。だが高木希美と言えば、今までオレが抱いてきた中でも、トップクラスの美人だった。思い通りにならずにやり捨てちまったが、顔はもちろん、あんなケツと、そしてあの美乳の両方を持った女なんて、他にはいなかったぜ……どうやら地元に戻ってきた甲斐が、あつたみたいだな……」

小久保がもう一度、舌なめずりをする。

強い者が弱い者から奪う。

それがこの世の中の仕組みだ。

小久保剣二はいつもそうやって、人から奪って生きてきた。

だが学校にいた時は、その学校のルールの枠の中で生きていた。

ルールに罰せられないぎりぎりのところで、小久保はうまく立ち回り、川辺正善のケツを蹴飛ばし、高木希美のケツを男根で突いた。

しかしここはもう、学校じゃない。

そして大人の男と女の間には、ルールはない。

オレがあいつらから奪うのを、邪魔する者はもう誰もいない。

今度は最後まで、徹底的に奪い尽くしてやるぜ……

かつて剣二のプレイボーイとしてのプライドを、唯一傷つけた女。

そして自分が権力を盾に、無実の罪を着せて退学にした男。

復讐と欲望、そしてかつての記憶がないまぜになり、剣二の中に異常な興奮が生まれる。

戻ってきた狼が、今まさに、二匹の無力な羊に襲いかかろうとしていることを、あの二人は知る由もなかった。

（体験版ここまで）

© 八ヶ岳昌司 2019年

ホームページ 寝取られと純愛

[nfllove.com](http://nfllove.com)

表紙絵 ジュエルセイバーFREE

<http://www.jewel-s.jp>